

# 伝文

日本口承文芸学会 会報  
第51号 2012年10月 発行

日本口承文芸学会  
〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25  
白百合女子大学 間宮史子研究室  
TEL 03-3323-5144 (内線207) / FAX 03-3326-1319  
E-mail koshobungei@mail.goo.ne.jp

## 口承文芸としての都市伝説 廣田 収

去る6月3日(日)に、愛知県犬山市で開催された大会でのシンポジウムは「口承文芸研究は都市伝説をどう扱うか」という大テーマのもと、サブ・タイトルは「都市伝説とはなんだったのかー伝説の1888~2012ー」というものであった。また、報告者・コメンテーター・司会の各位は、この領域では著名な方々ばかりであった。

その内容は、モランやブルンヴァンから始まる都市伝説の研究史と、噂話や怪談や怖い話、密室や廃墟が語りの装置とされる伝承の生産・出版、さらに新しいメディア媒体の登場によってテキスト性が希薄化し、個人的で断片的な情報の嵐が始まる現在に至るまで、都市伝説の情報と、研究の回顧、今後の展望についての議論に溢れていた。

聴衆のひとりとして懸命に議論を追いかけようとして迷路に陥り込んだ私は、ひどいめまいに襲われ、帰阪後も長く尾を引く頭痛に悩まされた。ただ日が経つにつれて、あれは口承文芸研究ではなくて、やはり都市民俗学のシンポジウムだったのだと、ようやく私の中で整理できたときに、頭痛は少しばかり癒えた気がした。私は民俗学徒ではなく、頑固な老いた国文学徒であるゆえに、会場の議論の内容とまぐ距離がとれなかったのに違いない。あの議論が、もし予告されたとおり「口承文芸研究」として「都市伝説」をどう扱うかというテーマに即したものであれば、と回想した次第である。ただ、心静かに考えてみると、今回のシンポジウムに対して私の抱いた何か「もやもやしたもの」の中身は、次のように整理できると思う。

- ① 都市伝説の概念規定や考察に、おそらく口承文芸としてのtextが、意図的に除外されていることが、かえって隘路を生み出しているのではないか。フロアと議論を共有するためには、対象とする都市伝説のtextが具体的に提示されていないことが、議論の収束しにくい理由ではないだろうか。私が国文学研究の立場だからというわけではなく、フィールド系の研究にテキスト系の研究を媒介させることが、新たな可能性をもたらすのではないか。
- ② 都市伝説研究における話型の議論が、従来の昔話研究の依拠する話型に、なお制約されているのではないか。あくまで推測であるが、都市伝説を考えるときに用いられる話型や語りといった概念が、あいかわらずモチーフ motif とその組み合わせというふうに理解されているような気がする。逆に、伝統的な昔話研究が用いてきた motif-index からいったん離れて話型を規定することが、新たな展望を拓くのではないだろうか。特に、話型や語りなどという用語は、どうも共通の認識が存在しないように感じる。それらはなお、先験的、実態的に捉えられているように思う。
- ③ 場というものの捉え方が、「学校という場」というふうに、空間的なものとして理解されているのではないか。議論では文脈 context をもって理解すべきだと論じられながら、都市伝説の成立する場を、それが伝承される空間としての「学校という場」というふうに理解するだけでは循環論に陥ってしまう。場は、やはり伝説というtextの解釈が成り立つ文脈 context として理解すべきではないだろうか。
- ④ 都市伝説という操作概念の有効性はあるのかないのか、日本文化や民俗、文芸にとって活性的な分析概念が何か、さらに検討を加える必要があったのではないか。

愚にもつかないことを色々述べたが、講師の方々や関係各位にとっては、自明のことかも知れず、また的外れで不愉快な感想であるに違いない。また、逆に何も建設的な提案のできない不明を恥じる他はないが、どうか御許しをいただきたい。このように、不勉強な私には実に刺激的なシンポジウムであった。発言の機会を与えていただいたことに心から感謝したい。(大阪府)

テーマ「3・11 一年後から」

日時：2012年3月18日（日）14:00-17:00 場所：立正大学（五反田キャンパス）

御話し 葉山 茂（国立歴史民俗博物館機関研究員、専攻：民俗学・生態人類学）

「被災地で考えたこと」（記録映像視聴を含む）

聞き手 山田 栄克（宮城県東松島市野蒜出身、本会会員）

聞き手 三浦 佑之（本会例会委員）

総司会 重信 幸彦（本会例会委員）

総司会の重信さんの挨拶。今回はシンポジウムという名称を使わず、様々な立場で関わってきた方から「聞くこと」を目的にした。3・11に関わりを持っている人に一人称で語ってもらい、私たち一人一人が、3・11以後という状況に向き合う立ち位置を確認する契機としたい。

「被災地で考えたこと」と題し、お話し下さった葉山茂さんは、海と生きる人々の生活の諸相と変容を研究。困った時に人はどのようにその困難を切り抜けるかという裏テーマもあった。3月11日、松山で震災を知る。どこか違う世界の物語のようだった。

国立歴史民俗博物館は気仙沼市小々汐地区で、文化7（1810）年築の古民家で網元の尾形家の行事や歴史の調査を2008年12月から続けていた。尾形家も津波に流され、4月4日、歴博の先遣隊が出発。葉山さんは4月半ば、自分も助けになるかなくらいの気持ちで出かけた。文化財レスキューとして民具・民家の生活の痕跡を救出し、クリーニングし、リストを作成した。モノは4500点以上にのぼった。記録映像は、谷全体に尾形家のモノが散乱している様子と、作業を映しだした。（2013年3月、国立歴史民俗博物館民俗展示新築オープン「くらしと技」コーナーで尾形家は再現展示の予定）

被災地では文化財レスキューが復興を遅らせているとの声もあり、こんな大変な時に文化財は必要か、研究する意味は何かと考えた。そして生活用具・民具はただのモノでないことに気づいた。そこには物語があり、モノはその物語を引き出す糸口だ。救急作業はフィールドワークであり、日常性の再構築であった。今は震災前のコミュニティを存続させる方法を画策している。

続いて聞き手の山田栄克さん。宮城県東松島市野蒜で18歳まで暮らし、進学のために上京した。東松島市は市街地60%が浸水し、死者1000人以上を数えた。

3月11日、地震後に津波が来ることをなんとか知らせようと両親に電話をしたが繋がらず、5日後ようやく連絡が取れた。この間の不安は最悪で、両親を救出するまでの記憶がない。自分の故郷は変わり果てていた。けれど故郷の神輿を見た時、どんな生活を自分たちがしていたか、その民俗誌を書きたいと思った。先ず被災地に行っていまを見てほしい。そして話を聞いてあげてほしい。

続いて三浦佑之さん。震災には赤坂憲雄さんたちと後方支援で関わる。2010年に『遠野物語』発刊100周年を迎えた遠野市では、2011年6月には遠野文化研究センターを発足させ、活動していく矢先だったが、大きく予定が狂った。

明治29（1896）年の明治三陸大津波の死者を語った柳田國男『遠野物語』第99話・水野葉舟「怪談会」・佐々木喜善「縁女奇聞」を紹介。立場の違いとともに、記録や伝承の重要性を話した。（詳細は「三つの九話 - 『遠野物語』と明治三陸大津波 -」pp. 141-156 『立正大学大学院紀要』第28号 立正大学文学研究科 2012年3月発行）

それぞれのお話の後、フロアからも被災地に向いた話がでた。最後に司会から、今日は始めの一步、これからも考え続ける企画をしていきたいと挨拶。シリーズ企画に今後も期待したい。（愛知県）

## 「肖像と伝説 —市橋鐸・林輝夫の内藤丈艸肖像収集から— 高木 史人」

大山開催の大会に相応しく、大山出身の研究者・市橋鐸の研究成果をもとに、大山出身の俳人・内藤丈艸の肖像とその伝説との関係について論じられた講演であった。高木氏は、既にこれまでも、市橋鐸の研究に注目し、民俗学者、伝説研究者としての視点から再評価を試みてきている。本講演でも市橋鐸の研究について、高木敏雄や柳田國男との接点、伝承者ごとに伝説を捉えるまなざしなどを改めて確認された。

丈艸の肖像は、市橋鐸と林輝夫（旧制小牧中学校で師弟関係にあった）の二人が収集したものである。高木氏は丈艸の木像、画像など10点を例に挙げて、肖像から窺える丈艸像を具体的に述べられた。肖像に描かれた丈艸は、俳人としてのイメージで描かれているもの、厳めしい風貌のもの、軽妙洒脱なもの、力の抜けた感じのものなど様々であり、それらを時代的に跡付けていくことは難しいとした。そして、隠者としての丈艸は、そのイメージの形成には上手く機能せず、結果、伝承の人物としての丈艸をつくりあげることができなかったことを説かれた。

最後に、現在の大山における丈艸にまつわる事物とその伝承、そして研究についても言及し、かつてのような草の根的な広がりや薄れ、風化しつつあることを報告された。

本講演は、近世俳諧説話の中の丈艸の説話が少ないという点について、肖像に描かれた丈艸像、丈艸を享受してきた歴史性から迫る、とても新鮮で興味深い内容であった。そして、高木氏の示された視点は、肖像と伝説形成の問題、伝説研究における伝承者や伝承の場の問題、また伝記と伝説研究の問題、或いは郷土の偉人を郷土研究として研究者がいかに向き合うかという問題など、口承文芸、特に伝説研究における重要な指摘が含まれていたと思う。また、個人的には、大山という地（場）をめぐって、郷土の偉人を郷土の人々がいか理解し、郷土の研究者が対峙し、対象化していくのかという点について考えさせられた。

（神奈川県）

## 第36回日本口承文芸学会大会 公開講演報告2

佐藤 優

## 『日本の伝説』と愛知の伝説 —東浦町生路井の杖立清水伝説をめぐって— 齊藤 純

氏の講演は、研究発表としても充分成立する緻密かつ詳細なものであった。講演は、柳田國男も『日本の伝説』（原題『日本神話伝説集』（1929年））所収の「大師講の由来」で取り上げた愛知県知多郡東浦町生路（いくじ）の生路井に伝わる杖立清水伝説を主な素材として弘法大師伝説の話型の変遷及び伝説がもたらす歴史的・文化的意義について考察するものであった。

講演ではまず、生路井は『張州府志（ちょうしゅうふし）』（宝暦2年（1752）成立）において弘法大師が掘った井戸であるとするが、中世期万里集九（ばんりしゅうく）の編んだ漢詩集『梅花無尽歳』の注釈部分には「熱田靈祠（日本武尊）」の伝説として説かれていた、と柳田の示した見解を確認した。そして、この伝説が熱田神宮と関わる伝承の背景について、氏神伊久智神社（旧称：八釘大明神）一帯は中世期熱田神宮の神領であり、享徳3年（1454）の「伊久智神社棟札」に「八釘大明神靈廟」とあることから、熱田神宮の別宮「八釘宮」の祭神伝承として一般的に流布していた日本武尊携行の草薙剣と関わらせ、中世において生路井の伝説は氏神の祭神の奇跡譚として伝承されていたとした。そして、この伝説に弘法大師が結びつく理由について論を進めた。知多半島に弘法大師信仰が流布するのは、文化6年（1809）以後であるとし、それ以前の知多郡の弘法伝承について『張州府志』などから検討を重ね、知多郡南知多町の尾張高野山派岩屋寺（いわやじ）の本尊にまつわる伝承が、弘法大師と熱田神宮との関わりを説いていることなどに着目し、熱田神宮の弘法大師伝承も視野に入れながら、生路井の伝説には中世以来の熱田神宮の弘法大師

伝承が及んでいた可能性を指摘する。さらに、この伝説が生路の銘酒「生路井」の由来とも結びつけられていることにもふれ、伝説がこの土地の名物由来としての役割も担っていたことを指摘した。こうした、伝説と名所・名物との関わりについては、大山市の瑞泉寺の事例についても言及し、昭和2年(1927)に瑞泉寺近辺の風景が新日本八景に当選したとし、近代の伝説の受容についても論究している。

こうしたテーマは、齊藤氏の伝説研究に一貫しているといえる。また、近世地誌や寺社縁起などの史資料の詳細な分析も氏の研究方法として認められる。ところで、かつて『日本伝説大系』は、伝説の文芸性重視を編纂趣旨の一つとして謳った。しかし、一方で伝説には歴史性も存在することは認められよう。さらに、柳田國男は伝説がモノと結びつくことを頻りに説いたが、自然物だけでなく、名所や名物とも伝説は結びつき、地域文化の中で機能している事例は齊藤氏の多くの論考で示されている通りである。地域文化における伝説の多様な機能や意味について詳細に検討することが今日の伝説研究のテーマの一つであるといえる。今回の講演は、その第一人者の研究視座及びその方法が遺憾なく発揮されており、冒頭でもふれたとおり研究発表としても充分聴き応えがある講演であった。(埼玉県)

### 第36回日本口承文芸学会大会 公開講演報告3

伊藤 龍平

#### 「吉良上野介とは何者だったのか - 史実、伝承、虚構のはざまで - 川田 順造」

堤を造って治水事業を進め、新田開発にも尽力したという。赤馬に乗って領国を回り、民情を視察したという話もある。『仮名手本忠臣蔵』でお馴染みの吉良上野介義央の逸話である。ステレオタイプな悪役像とは対照的な名君伝説だが、いずれにせよ伝承の装いをまとって、なかなか血の通った吉良の面影はうかがえない。吉良に限らず、「忠臣蔵」の登場人物の多くは歴史上確かに実在したにもかかわらず、いざ実像に迫ろうとすると、みな影絵のように表情がぼやけてしまう。彼らは一体、何者だったのだろうか。

川田順造氏の講演は、日本人の心に浸透した「忠臣蔵」の物語がどのように受け止められてきたのかを問うものだった。副題に「史実、伝承、虚構のはざまで」とあるように、近世の芝居文化のなかで、消費されつつ生成していった「忠臣蔵」伝承を、写真や図像を紹介しながら追いかける。虚と実のあいだを行き来する論旨はスリリングで、吉良に焦点を絞ることにより、可能性としての「反・忠臣蔵」が提唱された。

虚実皮膜論といえは近松門左衛門だが、川田氏によると、近松の『兼好法師物見車』(1706年頃)が「忠臣蔵」を題材にした作品の古い例だという。近松家の口伝にも赤穂事件に関わるものがあるそうで、近松洋男『口伝解禁近松門左衛門の真実』(2003年)を引いて、史実として伝わらなかったもう一つの「忠臣蔵」伝承に言及している。近世期には、好事家のあいだで赤穂浪士たちの世間話とともにゆかりの品々も取り引きされていたが、背景には、川田氏の述べるような「忠臣蔵」外伝の世界があるのだろう。

近代における赤穂義士の復讐に関する話題も印象的だった(これは吉良の失権を意味する)。庶民のあいだで絶大な人気を誇っていた赤穂義士は、公式には永らく犯罪者として扱われていた。それが明治元年の勅書により、大石良雄ら四十七士は晴れて名誉を回復した。ここから、明治帝はなぜ浪士たちを許したのか、という問題が浮かび上がってくる。川田氏も指摘していたように、彼らの行為は反国家的であったが、直属の主人に対しては「忠」であった。忠君愛国が強調される時代のなかで、あるべき理想的な「忠」の姿を、江戸/東京市民にアピールしたのではないかというのが川田氏の説である。時代の変遷のなかで、「忠臣蔵」と向き合う人々の心も変わっていったのだ。

口承文芸研究という枠にとらわれないスケールの大きな講演だった。

(台湾)

## 「大学生の就職活動・「自己分析」からの「声」－「成長物語」をめぐる共同主観性の生成－ 矢野 敬一」

大学生の就職活動、いわゆる「就活」におけるエントリーシート作成および、面接時における発話という言語行為に着目し、これを〈口承〉研究の対象と成し得るものとして問題提起した上で、就職活動における自他の「成長物語」に伴って生成される共同主観性に迫っていく発表であった。まず、エントリーシート作成時に必要となる大学生の自己分析の中に、自己のライフヒストリーに関するナラティブ構築という作業が内包されていることが指摘され、さらに、大学生がいかにナラティブを構築しているのか、そこにはいかなる力学が働いているのか、という問題が掘り下げられた。エントリーシート作成における自己分析では、過去の自分史を整理すること、未来の自分像を設定すること、家族・友人・先輩など第三者の意見を参考にしながら、過去・現在・未来の自分を文章化によって客観的に把握すること、が必要となる。そこには、未来の自分像に向けていかに成長していくかという「成長物語」が含まれているという。

さらに矢野氏は、企業説明会における人事担当者の語りにも、ロールモデルとしての成長物語が含まれていることを指摘し、就活という場が生み出す共同主観性という問題を提示した。企業説明会における人事担当者の語りは、就活生に、目指すべき未来の自分像を投影させる力を持つ。また就活は、就活生の多くに「つらかった」「面倒だった」などの否定的な感想を抱かせるものの、同時に彼らはそれ以上の達成感を得ているという。しかしながら、就職後間もなくの離職率が高いという二十年来の傾向は依然として変わらず、「成長物語」をめぐる共同主観性には、ある種の脆さと危うさが含まれてもいる、との指摘も為された。フロアとのやりとりの中からは、一人の就活生の語りの中にも受験先によって異なる複数の成長物語が存在すること、「達成感」の語りの背後にあって顕在化しない失敗者の声があることなど、「語り」という論点から就活を捉えた際に見えてくる声の多様性といった問題点が次々と浮上し、〈口承〉研究の新たな可能性を含む刺激に満ちた発表となった。

## 「枝雀と芭蕉 一枝雀の落語と芭蕉の俳諧を巡って－ ハリト・ムズラックル」

松尾芭蕉「冬の日」と桂枝雀の落語との比較を行った上で、高座の観客を「複数の作者」として取り込む枝雀の落語を“座の文芸”の系譜において捉え直す、という試みを提示する発表であった。高座における落語の現場は、演者による話芸が観客のリアクションを生み、さらに演者はそのリアクションを取り込んでリアルタイムに落語を形成していく。ハリト氏は、枝雀においてその傾向が顕著であるとする。正統派と称される三遊亭円生や三代目古今亭志ん朝の落語はルールによる縛りの強い連歌と共通し、伝統的なスタイルを知りつつもそこからの脱却を図る枝雀の落語は俳諧に共通するという。そして、枝雀の落語を座の文芸としての俳諧と比較した上で、両者には次のような共通点があったとした。i) 作者＝鑑賞者、作成のプロセスを皆で楽しむこと、ii) 意外な「美」への期待、iii) 曖昧性、iv) 挨拶性、v) 指導権。

i) は作者すなわち鑑賞者であること、また、場を共有する皆が文芸の生成に参加していることを示し、ii) は即興的・偶発的な芸術性への期待、iii) は多義的な解釈が発生する可能性、iv) はマクラと発句の共通点、v) は場を形成する中心的人物が掌握する文芸的な指導権を意味している。また、落語の祖とされる安楽庵策伝が、主客によって「一期一会」の場を形成する茶の湯の精神を持ち併せていたことに言及し、策伝の落語には、俳諧と茶道の双方が持つ共同制作芸術としての側面があったと仮定する。そして枝雀は、こうした日本の伝統である「座」への回帰を果たそうとしていたのではないかと結論した。フロアからは、落語を座の文芸と捉えて他の文芸ジャンルと比較するのであれば、落語家一般の傾向と、枝雀の特徴とを論じ分ける必要があるのではないかという意見や、座の文芸としての俳諧をとりあげるに際しては、むしろ芭蕉以外を視野に含めたほうが適切なのではないかなどの有意義な意見も出され、活発な議論が展開した。(東京都)

## 「サハリン口承文学の地域差 丹菊 逸治」

丹菊逸治氏の「サハリン口承文学の地域差」は、サハリンに居住していたニヴフとアイヌにおける「異類婚譚」の地理的分布の差に着目することで、その成立過程を考察した発表である。ニヴフとアイヌの異類婚譚は話全体が類似しているため、伝播による相互影響があった可能性が高い。地理的分布をみていくと、カラス、カレイ、アザラシとの婚姻譚は、ニヴフ・アイヌ共にサハリンの東海岸・西海岸のどちらか一方で採録されている。海の神やエイとの婚姻譚では、ニヴフは東海岸に、アイヌは西海岸に分布しているが、これは採録地や説話中の地名からニヴフの移動が理由として考えられる。そのため、これらの異類婚譚にみられる東西差は、アイヌがサハリンに北上し、ニヴフとの南北の住み分けが確立した後にできたものだと結論づけられた。質疑応答を通じて、エイの婚姻譚は北海道アイヌにも似た話があることからニヴフの民族移動以外による伝播の可能性も提示されるなど、今後の新たな展開も期待させる発表となった。

## 「美談集のなかの『君が代少年』—植民地下台湾の公共心と愛国心— 伊藤 龍平」

伊藤龍平氏の「美談集のなかの『君が代少年』—植民地下台湾の公共心と愛国心—」は、昭和10年4月21日発生した台湾大地震の際に生成した震災美談のひとつである「君が代少年」の話を、植民地下台湾で刊行された震災美談集のなかに位置づけることによって考察した発表である。美談は「愛国心」に結びつくものだが、敵国の存在を欠いている震災美談において直接的に志向されているのは、冷静沈着な対応であり、自己を顧みず他者の救助へ向かう「公共心」である。その中で直接的に「愛国心」を目指す「君が代少年」は異質である。また、美談には、聞き手・話し手に理想的な振る舞いを強要するという権力性の強さを内包している性質があるという説明もなされた。フロアからは、かつての美談が現在の文脈でどのように引用されているのかという質問が出た。現在「君が代少年」は美談としては機能しておらず、知識あるいは地域のエピソードにすぎなくなったという答えであったが、東日本大震災後の日本においても美談は生成されていることから、伊藤氏の発表は極めて今日的な問題にもつながるものであると言えるだろう。(千葉県)

## 第36回日本口承文芸学会大会 シンポジウム報告

小池 淳一

## 「口承文芸研究は都市伝説をどう扱うか」

都市伝説をテーマにした今回のシンポジウムは次の4人の報告とコメントから始められた。最初の報告は飯倉義之氏「都市伝説とはなんだったのか—都市伝説の1988～2012—」、次に重信幸彦氏「『都市伝説』という憂鬱」、最後に山田巖子氏「都市伝説と〈経験〉」、さらに渡部圭一氏のコメント「民俗学にとっての80年代とは」であった。

飯倉氏は都市伝説がドラマやマンガのコンテンツとして消費される現状を指摘したのち、1980年代の都市伝説の紹介とウワサやロコミブームを確認し、いったん、そうしたブームが終息したかにもみえたが、2005年以降、インターネットなどであやしい「話」として増殖しつつある様相について述べ、最後に商品として生産・消費される都市伝説に立ち向かうことは可能か、と提起した。重信氏は、アメリカ民俗学の周縁的な話題であった Urban Legends を日本の民俗学において〈都市〉というシステムを問うために「翻訳」した1988年当時の事情を振り返り、それらは〈メディア〉と〈身体〉といった間とも連続していたことを述べた。さらにそうした視点は柳田國男の「世間話」の概念とも響き合うことを改めて確認した。山田氏は、都市伝説を自己の経験をどのように語るかに際して用いられる新語としてとらえ、「都市」的なものとのつきあい方が映し出されること、やがてそれがインターネットなどを通じて類似の経験を束ねるものとなり、

さらに批判・椰諭の語法になっていることを指摘した。

渡部氏のコメントは日本の民俗学における80年代の認識転換を確認し、そのなかでも場やコンテキストを問う流れと話の内容そのものを問う視点についての可能性を強調した。それに対する報告者のリプライの要点は、都市伝説の担い手の問題、場を関係性と読み替える視点、都市伝説と名づけることでの変換などであった。フロアからは、場やパフォーマンス以降の可能性やネットロアの扱い、肉声・口頭でのコミュニケーションの重視、さらに「学校の怪談」や「民話」という概念や視点の問題が提出された。

論点は多岐にわたり、司会者である小池が秩序だった整理を行わないと途中で宣言したせいもあって、やや拡散した議論となったことはあるいは物足りない印象を与えてしまったかもしれない。しかし、現代社会におけるさまざまなコミュニケーションの様相を口承文芸研究発の概念である都市伝説を切り口に、現象面でも研究の方法の面でも正面から取り上げて、その〈歴史〉と〈可能性〉とを論じることができたのは、このシンポジウムの大きな成果であったと考えている。(東京都)

### 第36回日本口承文芸学会大会 市民向け企画 第一回口承文芸公開セミナー報告

杉浦 邦子

#### 「『お話・語り・ストーリーテリング』活動から見えてくること

##### 一口承文芸研究と実践活動との相互交通のために―

大会二日目、午前9時40分から12時30分まで、上記セミナーが開催された。市民に向けた企画として初めての試みである。二人の講話と質疑応答からなる「セミナー」と、語り手二人の「実演」の二部構成である。

「セミナー」に先立ち、4階の中講堂では研究発表が始まっている。「セミナー」は5階で行われ、参加者は、終了後直ちに中講堂に移動し、全員で「実演」を聴くという流れである。(語りの時間は90分)

日曜日の早朝にもかかわらず、会場は約50名の参加者で埋まった。多くは、開催地犬山市の他、名古屋市始め県内各地でお話の活動をしている人達である。

「セミナー」の講話は、本企画立案者である高木史人氏の「昔話研究からの問題提起」と山口良太氏の「昔話研究の最近の動向について」。高木氏は、昔話を特定する理論や伝承経路の理論付け等を理解した上で、語り手の語り口や音声記録を丹念に聴くことによってわかった、日本における昔話の語り方の特徴を説かれた。即ち、語り手は身近な地名を入れたり登場人物に名前を与えたりして語っていた、と。山口氏は、身振り手振りなど表現の研究や伝承の過程で生じる昔話の変化、聴き手の役割等最近の研究課題について解説し、研究者と実践者の教え合いの大切さを強調された。両氏の話からは、語り手達へのエールを感じた。

会場からは、フィールドでは語り手の思いをどのように受けとめるのかとの質問や、日本の昔話を子どもに伝えるのは外国の昔話より難しいとの発言等があった。一方、幼い子どもは日本の昔話を好むようだとの実践の現場からの発言が印象的だった。

この後、階下の中講堂に移り、110名の聴き手を前に語りの「実践」が行われた。

名古屋市の下澤いづみさんは、図書館や小学校などでお話をしたり、指導者としても活躍されている。「小石投げの名人タオカム」(ラオス)「レンペルシュティルツヘン」(グリム)等3話を、印象深く端正に語られた。

中津川市の三戸(さんと)律子さんは、子ども達と一緒に地域のお年寄りから聴いた昔話を方言で語っておられる。「ふたりのさむらい」「お伊勢参り」「こぬかった嫁さん」「娘のおなら」「木仏金仏」「茄子川」等8話を、心地良いリズムの方言で語られた。

来年の東京大会でもこの試みは継承されるという。相互交通の発展を期待したい。(愛知県)

## 事務局便り

### ○事務局からのお問い合わせ

学会では、東日本大震災で被災された会員の情報を集めております。被災された会員におかれましては、事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

### ○会員の異動（敬称略）

《新入会》中神嘉貴（埼玉）・アハマドヒスブラー（東京）・趙月梅（愛知）・紀伊國屋書店和書仕入部（講読会員）・有隣堂書籍外商部（講読会員） 《再入会》落合奈央（東京）

《退会》磯沼重治（東京）・姜峻（東京）・戸田智和（京都）・吉田敦彦（東京）・松岡享子（東京）・佐藤貴美子（神奈川）・鈴木正彦（東京）・樋口淳（神奈川）・針原孝之（東京）・木村紀子（大阪）・小林吉一（栃木）・梶濱亮俊（大阪）・井戸宏子（岐阜）・甲賀美智子（東京）・丸善神奈川静岡営業部（講読会員）

《物故》坂本吉加（青森）・古沢和夫（東京）・岡田耕二（千葉）

### ○寄贈書籍

米屋陽一編著『上蛇窟ムラばなし百話—米屋トモエ・聴き書き—』米屋陽一民話・伝承研究室 2011年3月／米屋陽一著『口承文芸と国語・教育』米屋陽一民話・伝承研究室 2011年5月／『国立歴史民俗博物館研究報告』第167・169・170・171・172・174集 2011年11・12月・2012年1・3月／神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』28 平凡社 2012年2月／神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第44巻11・12号、第45巻1・2・3号 2012年2～6月／日本民俗学会『日本民俗学』第269・270号 2012年2・5月／阿部敏夫著『北海道民間説話<生成>の研究 伝承・探訪・記録』共同文化社 2012年3月／阿部敏夫著『コロボックル伝説生成資料 北海道民間説話の研究（その9）』『北星学園大学文学部北星論集』第49巻第1号（通巻第56号）2012年3月／日本民話の会『日本民話の会通信』No. 220 2012年4月／野村敬子編『江戸川で聴いた中野ミツさんの昔語り—現代昔話継承の試み—』瑞木書房 2012年6月／渡辺伸夫著『椎葉神楽発掘』岩田書院 2012年6月

### ○会報データベース化についてのお問い合わせ

学会では会報のバックナンバーをデータベース化して会員及び一般に公開して利用の便宜をはかりたいと考えております（個人情報を除きます）。データベース化は順次古い号から進めて参りますが、現会員で会報に執筆された方でデータベース化にどうしても不同意な方は、お申し出いただきたく存じます。通信等での個別の許諾はとりませんので、事務局宛にご連絡をお願いいたします。

**\* 今後、会報第52号以降の執筆者については、データベース化に同意して執筆されたものとして許諾はとりません。**

2012年10月1日

○国際口承文芸学会（International Society for Folk Narrative Research; 略称 ISFNR）第16回大会の専用公式サイトができています。大会は2013年6月25日～30日、リトアニアのヴィリニユス（主催はリトアニア文学民俗学研究所とヴィリニユス大学）で開催され、大会総合テーマは「現代世界における口承文芸—その単一性と多様性（Folk Narrative in the Modern World: Unity and Diversity）」です。大会参加と研究発表は非会員でも可、参加申込みはまだ可能です。詳細は以下のサイトをご覧ください。www.isfmr2013.lt

### ○日本口承文芸学会事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25 白百合女子大学 間宮史子研究室

Tel: 03-3326-5144 (207) / Fax: 03-3326-1319 (児童文化研究センター) / E-mail: koshobunget@mail.goo.ne.jp

### 日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。

入会金1000円、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。